

---

# 虹のハシ

風上悠鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虹のハシ

### 【Nコード】

N9687G

### 【作者名】

風上悠鈴

### 【あらすじ】

こたちなやか

木立彩香などの愉快な仲間たちが繰り広げる全寮制魔法学校物語

## e p・i R M S (前書き)

下手ですが、頑張って更新していきます！

## e p・1 R M S

レインボーマジックアイランド……大きな虹がかかる魔法の国。

そんなレインボーマジックアイランドの大きな虹の端には全寮制魔法学校があります。

さて、今日はその全寮制魔法学校、『レインボーマジックスクール』の入学式みたいですよ！

「ふぁー……眠いなあ……」

入学式と書いてある派手な看板がR M S（レインボーマジックスクールの略）の正門に立っている。

この物語の主人公、木立彩香は今日からこの全寮制学校に入学する。つまり今日から寮に入るのだ。

それにしても眠い。彩香は大きな欠伸をした。

彩香は現在12歳。8月に13歳になる。

得意の魔法は変身。

魔法使いは主に5種族に分類でき、彩香はそのうちの時の種族。

（ちなみに他の種族は、火・水・風・光）

眠いと呟く彩香に誰かが肩をたたいた。

「ふえ？だあれ？」

彩香が後ろに振り返った。

しかし、そこには誰も立っていない。

彩香は頭にハテナマークを浮かべながら自分の教室へ向かった。

この学校は生徒が少ないのだろうか？さっきから校内にいる人が少ない。

そんなことを考えながら彩香は古びた校舎の階段を一段一段踏みしめながら駆けあがって行く。

彩香の予想を裏切り、教室が並んでいる廊下から教室から溢れる楽しげな声が聞こえた。

人は思ったよりいるみたいだ。

彩香は自分のクラスもこんなに明るいんだ！と思いながら教室に足を踏み入れた。

しかしそこには薄暗い教室に机が8脚ほどしかなく、誰もいなかった・・・

「ウソ・・・何でー?!」

教室の中心で彩香は叫んだ。

そのとき教室に誰が入ってきた。

「彩香ちゃんだねえ！よろしくねえ！」

そこに立っていたのは美少女。

赤っぱい髪はおろしていてオレンジのアメピンで髪をとめている。

顔は小さいし、目も赤くてぱっちり二重が可愛い。

スタイルの良く、身長が小さいので多分男子にモテるタイプだろう。赤いネクタイ・赤いプリーツスカート・ブラウスという制服がとて

も似合っている。

（普通は普段着を学校に着てくるのですが、式ときには制服を着ます。）

女の子は悪戯っぽく笑った。

・・・可愛いなあ。

女の彩香でさえもそんなことを思った。

「あのね、さっき彩香ちゃんの肩叩いたんだけど、知ってる??  
あーなるほど。さっき正門の辺りで肩を叩いたのはこの子だったんだ。」

魔法かなんかで素早く逃げたのかな・・・？彩香はその自分の推測に納得した。

「あ！私の名前言うの忘れてたあ！私はねえ、赤松深紅あかまつみくって言うの！  
タメで呼んでね、あと種族は風で得意な魔法は風化！」

続く

## e p・i R M S (後書き)

お楽しみいただけたでしょうか？次回のお楽しみに！

## ep.2 教室にて（前書き）

下手です。でも大目に見て下さい。

## ep.2 教室にて

「風化かー・・・あたしは時とか変身の魔法しか使えないんだよねー。ってかなんでこのクラス机は8脚しかないの?！」

「このクラスがレインボークラスだからじゃないの? 私自分がレインボークラスって分かったとき、すっごく嬉しかった!」

深紅の言葉に彩香は眉を顰めた。

「なあに? レインボークラスって。」

今度は深紅が眉を顰めた。

「知らないの?! RMSって学園内で階級が決まっていて全部で七つの種類があるの。下からレッド(R)・オレンジ(O)・イエロ―(Y)・グリーン(G)・ブルー(B)・パープル(P)・スカイ(S)って言うんだけど、一番上のスカイクラスは別名レインボークラスって言われてるの。」

深紅はここで一息つくと続けていった。

「で、階級&年齢別でクラスが分かれていて、スカイクラスは別名レインボークラスって言われているの! で、レインボークラスってエリートだからレインボークラスの人って一学年に8人しかないの! つまりね、彩香ちゃんはエリートなんだよ?！」

彩香はいまいち深紅の話についてきてないみたいだがしばらくしてポン、と手を打った。

「そうなの?! つかあたし、一番上の階級なんだー! すごい! つかあたしたった8人のうちの一人なんだー!」

深紅は戸惑いながら小さく頷いた。

「それよりさー、あとの6人どこにいんの?」

彩香の話題をかえるスピードに戸惑いながら深紅は教室の窓から見える高層ビルの様な建物を見た。

「えっとねーみんな今寮にいるはずだよ?」

彩香は深紅の視線の先に目をやった。

「寮・・・?」

「うん。あのでっかい建物って寮なんだよ?・・・そーだ! 瞬間移動魔法使って行ってみよーよ!」

彩香は頷いた。

「じゃあ、行こう!・・・せーの!」

彩香の合図で彩香と深紅は寮に飛んだのだった。

続く

e p . 2 教室にて（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？次回は寮がテーマです！次回もお楽しみに！

e p . 3 二二二つて寮なんですかッ?! (前書き)

相変わらず、下手ですが、ぜひ読んで下さい!

e p . 3 ここつて寮なんですかッ?!

彩香・深紅が瞬間移動した場所はRMSの寮。

「そこはとても高級なホテルの様な内装だった。

「ここが寮なの?!」

そう叫ぶ彩香の口を深紅は塞いだ。

「シーー!みんないるんだからあ!・・・もしかして・・・寮、来たの初めて?」

彩香はこつくりと深紅に頷いた。

「嘘お・・・!なんで・・・?寮の部屋に荷物運び来なかったの?」

「え・・・?てつきり今日みんな運び込むのかと思った。だからかばんに縮めた家具持ってきたの。」

深紅は彩香の持っているかばんを見た。

「時間があるから彩香ちゃんの部屋寄ってこ!で、家具も置いていこう!私の部屋もきていいし。」

彩香はニツコリと笑うとロビーを指差した。

「あそこ、なにすんの?」

「あそこでこの寮の鍵を受け取るの。」

「ホテルみたいだねー。」

彩香たちは鍵を受け取るとエレベーターで最上階に向かった。  
寮の階は階級があがるほど上の階になるらしい。

「ここだねえ！あ、彩香ちゃんの部屋、私の部屋の隣だ。」

「あ、ホントだ！」

そんな会話をしながら彩香は自分の部屋のドアノブを回した。

――彩香の部屋は驚くほど綺麗だった。まるでホテルの超スイートルーム――！！

備え付けのシャワールーム・ジャグジーバス・大型テレビ・ツインベットなどなど・・・  
キッチンもついている。

それに部屋がとてつもなく広い！  
広い部屋が3つもある。

「よっし！いつくよー！荷物よ、荷物、大きくなあれ！そして正しい位置につきなさい！」

彩香がそう唱えると、彩香のかばんから次々と荷物が出てきて部屋中に飛んで行く。

「あとは任せたよー。じゃ、いこつか。深紅の部屋。」

「うん、いいよー!」

そう言うとき深紅は彩香を自分の部屋に招き入れた。

深紅の部屋は・・・とにかくすごい。

赤とオレンジで埋め尽くされていて目がチカチカしそうになる。

薄めのオレンジ（蜜柑色？）の壁紙にフローリングには丸くて赤いラグマットが敷いてある。

オレンジの革のソファに赤いガラステーブル。

カーテンは赤とオレンジのドット柄だ。

冷蔵庫も赤い。

そしてベットは赤く、掛け布団はオレンジだ。（これは寝室にあります。）

他にも赤いタンスの引き出しがオレンジだったり、オレンジのクローゼットの引き出しが赤かったり・・・

オレンジの学習机に赤い椅子。この学習机セットは赤とオレンジの本棚がある、書斎に置いてあった。

「うわぁ・・・すごい。」

絶句する彩香に深紅は笑った。

「すごいでしょう!」

確かにすごい。でも目がチカチカする。

彩香はオレンジのクローゼットを開いた。

そこには赤やオレンジの服が沢山かかっていた。

その中にはパーティー用の服装にも見えるドレスもある。

「すっご。．．．このドレス。」

深紅は笑った。

「だって、今日の入学パーティーで着るじゃない。」

彩香は眉を顰めた。

「．．．そんなのあったわけ？」

「あったよ．．．まさか．．．」

「聞いてない！」

続く

e p . 3 二二つて寮なんですかッ?! (後書き)

次回もお楽しみに! 次回はついにレインボークラスの面々が・・・?  
?

e p . 4 クラスメイト（前書き）

間があきましたがぜひ読んで下さい！

## ep.4 クラスメイト

こんにちはあ！今回はわたくし、深紅がこの話を進めて参ります♪

えつとお・・・彩香ちゃんは学園の入学案内書を読んでいなかったみたいでえ・・・

なんだか心配になってきましたあ・・・

でもってえ、彩香ちゃんが疲れたとか言い出したので今私たちは寮のロビーで休んでいます。

「知らなかった・・・パーティがあるのね！」

そう言っている彩香ちゃんの顔は輝いている。

「まあ、パーティーまで時間があるからそれまでにドレスは用意しましょう。」

彩香ちゃんはドレスという言葉に一瞬顔を嫌そうに歪めたがパーティーに気が向いているみたい。

「深紅やないか！おツ？！その子・・・」

振り返ったら碧<sup>へき</sup>が立っていた。

今話しかけてきた人は小さい頃からの幼馴染で藍沢碧<sup>あいざわへき</sup>と言います。

火の魔法使いでちゃきちゃきの江戸っ子のくせして関西弁なのは・・・  
・分かりません。

碧とは赤ちゃんの頃から仲が良かったです。

「そうよお、この子はレインボークラスの木立彩香ちゃんよお。」

「碧……。お前さつきからうるせーよ……ったく。ってか誰だそいつ。」

良く見ると碧の後にもう一人男子が立っていた。

普通の女子だったらキヤーキヤー騒ぐ。

だってこの男子は『カッコイイ』から。

でも私はそんなルックスの良い子とかどうでもいい。

そんなのだからこの男子にはなんとも思わない。

……彩香ちゃんも私と一緒にいたい。

「翠<sup>すい</sup>。こいつが俺の幼馴染の深紅<sup>ふかこう</sup>や！」

もしかしてこいつもレインボークラス？

「深紅、彩香ちゃん！こいつはレインボークラスの蒼井翠<sup>あおいすい</sup>や。翠、この子たちもレインボークラスみたいやで！ちなみにこっちが深紅でこっちが彩香ちゃん！」

翠はさつきから表情が変わっていない。

なんかこつゆう男子は苦手だ。

「あら、黒月<sup>くろつき</sup>！この子たちのバッチは虹色よ！」

「本当だな、紫月<sup>しじき</sup>！こいつらもレインボークラスみたいだ！」

私たちは振り返った。

わあ……双子？

なんだか顔がそっくり。

胸には虹色のバッチ……この子たちもレインボークラスなんだ……

・

「灰田紫月！とっても優しい美少女よ！」  
はいだしつき  
はいだくろつき

「灰田黒月！何もできない単なる変人！」

はあ・・・？何この人たち・・・。  
なんか変なこと言ってるよ・・・。

「今年からレインボークラスの定員6人にやったみたいやで！ってことはここにおけるメンバーが1年のレインボークラスのメンバーや！よろしゅうな！」

碧がにっこりと笑った。

はあ・・・なんか展開についていけないよあ・・・。

e p . 4 クラスメイト（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？次回もお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9687g/>

---

虹のハシ

2011年10月6日00時41分発行